素晴らしい暖地向牧草のはなし

イタリアンライグラス

安孫子六郎

府県における牧草の栽培はその立地上短年生であること、収量の多いことなど輪作の効く飼料作物であることを前提とする。すなわち暖地では自給飼料の栽培は極めて集約的でなければならない。この条件に合致するものとしては冬でも青い、しかも早春の生長が速く初期の収量の多いイタリアンライグラスに如くものはあるまい。

イタリアンライグラス Lolium Italicum, Braun. は暖地むきいね科牧草中大いに注目に値するものの一つである。

イタリアンに類似する牧草には

ペレニアルライグラス Lolium Perenne, L.

コンモンライグラス Lolium Multiflorum.

の二つがあり、前者は永年性で牧草地に用いられ、後者はイタリアンライとペレニアルライの雑交したものと称せられ、短年性で、その性状も両者の中間にある。イタリアンライとコンモンライがよく混合されている場合もあるが、区別するべきものと思う。

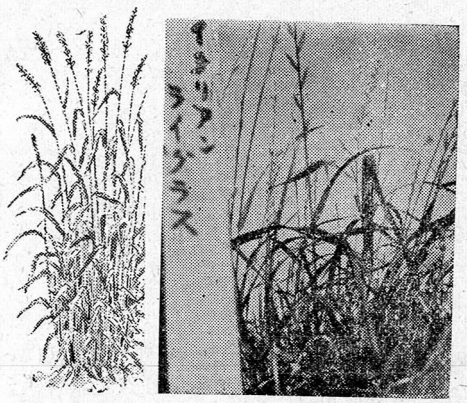
これらの中で最も有用なのは、暖地においてはイタリアンである。最近わが国でもこの草の優秀性が認識され、栽培面積は急激に増加してきている。

原産地

本種の原産地は川瀬氏によれば地中海地方の原産で、百年以前よりイタリヤのロンバルジ平原に栽培されていたと称せられているが、現今は世界各国の酪農地帯に普及し、牧草地の混播用として欠くべからざる位置を占めている重要牧草の一つである。

性状

イタリアンは短年性で、府県では冬作一年生として田畑の輪作に取入れて妙である。



イタリアンライグラス

艶のある軟い細い葉は真に美しい。また耐寒性の強いことは奇蹟の草（ケンタッキー31フェスク）に勝るとも劣らない。

当場における成績をみると、耐寒性は最強である。今年のごとく零下一〇度の日が数回、零下八度の日は十回ぐらいあり、降雨なく極めて乾燥したにもかかわらず、十二月下旬より二月末に至るまで青刈をして豚、鶏、犢牛の飼料に供した。特に豚の冬の青草としてこれに勝るものはない。エン麦、ライ麦よりはるかに好み、飽くことを知らない。草勢が旺盛で、草丈は三尺五寸に達する。いね科牧草中で早春の魁をするもので、一尺内外程度で青刈をするときは晩春まで数回刈取りができる。再生力も極めて旺盛で、十二月下旬青刈したものは三月中旬にはすでに第二回の青刈りが可能なほど早く再生する。長野県で行われているように冬季間灌水することにより、さらに良質の草を多く収穫できるであろう。冬から早春の青刈牧草として極めて有利な牧草である。

当場の成績をみると（秋播）

第一表

取り寄せ先	播種期	発芽期	出穂期	生草収量（反）	備考
下総御料牧場	三十六年十月七日	十月十四日	三十七年五月七日	一〇〇貫五	刈取期五月十日
千葉農業技術研究所	八日	十五日	四月二十四日	八一〇五	一回刈収量
デンマーク輸入A	七日	十四日	五月七日	一二七五	輪作の関係上刈取り
デンマーク輸入B	七日	十四日	同	一一八五	は一回で中止した。
北海道雪印	七日	十四日	同	一〇九五	畦幅二尺条播
上野幌育種場					

なお春播きの場合は反当り八百貫程度であつた。イタリアンの短所として暑気に弱いので、秋播きをして早春より刈取り、再生を促して刈取り回数を増したほうが有利である。

適地

イタリアンはやや湿りのある肥えた土地を最適とするが、筆者のいるいわゆる関東ロームの軽鬆土の乾燥地帯でもよく生育するから、土地を撰ばぬ牧草である。耐寒性は強く、耐旱性も相当強いが、耐暑性は弱いから、あくまで冬と早春の飼料として活用すべきものである。三月中・下旬の青草欠乏期に本草は真に救いの草となるのである。

耐寒性及び耐暑性を観察すると第二表のとおりである。

播き方

条播と撒播がある。畦幅二尺で条播するときは反当り二听乃至三听（約二〜三升）でよい肥料も堆肥三百貫、過燐酸六貫、硫安三貫目を施す。畦の深さは三寸程度、深きに失せぬようにして播種後浅く覆土して、足で鎮圧する。発芽は容易であるから、

第二表

種類	耐寒性	耐暑性
イタリアンライグラス	+++++	+
オーチャード	+	++
チモシー	+	+
トールオートグラス	++++	+++
ペレニアルライグラス	+++	++
メドウブロームグラス	++	++++
スイートバーナルグラス	+	+++
トールフェスク	+++	++++
プレリーグラス	+++	+
ケンタッキーブリューグラス	+	+++
メドウフォックステール	○	+
レッドトップ	○	+++
アルターフェスク	+++	++++
ケンタッキー31フェスク	++++	++++
メドウフェスク	+	+++
ベルベットグラス	++++	++++
ニュージランドフェスク	++++	++++
チューイングフェスク	++++	++++

備考　耐寒性　昭和二十七年二月二日　昭和二十八年
　　耐暑性　昭和二十六年八月十一日　昭和二十七年
　　主として茎葉の枯凋状態により観察調査した。

覆土はできるだけ浅くすることが大切である。

撒播は各種牧草と混播して牧草地を作る場合に行うことが多い。その場合、五听乃至六听を適量とする。この種子は休眠期間が短いので、取り播きしてもよく発芽する。水田の裏作とする場合は、稲の立毛中、落水後十日頃に撒播するがよく、種子が地面に落下するように注意を要する。稲刈取り後耕起せず、田面に播き、足にて踏みつけただけでも十分発芽する。

播く時期

秋播きを普通とするが、春早くでもよい。低温で発芽する。当場では八月中旬から一月下旬まで十日を隔てて播いたが、冬中でも発芽するが生育が遅れるので、後作の関係や早春の飼料に間に合わぬから、冬季間の播種は意味のないことである。八月下旬に播いて十二月上旬青刈する方法もあるが、普通は十月十日より二十日の間が適期で、これより早くとも晩くとも越年状態が劣るようである。しかし、前作の収穫が後れて畑を裸地で越冬する場合があれば。十一月の中下旬でも播いて差支えない。要するに、大・小麦の播種期と大体同様に考えて、地方により加減すると間違は少いであろう。霜害のある地方は踏圧を二〜三回やれば完全に冬を越す。適地に蒔いたものはあえて踏圧の必要は認めない。

利用法

青刈用あるいは放牧用として広く活用されるが、特に牧草地の初期収量を挙げるために愛用される。牧場では燕麦等と牧草種子を混播しているが、イタリアンを利用するとさらに有利で、初期の収穫を多く得ることができる。イタリアンと組合わせて有利なものはクリムソンクロバーで、一年生のまめ科であり、クロバー類中春最も早い生長をするものであるから、クリムソンクロバーと混播するを有利とする。すなわち二尺畦幅で条播する場合は先ずクリムソンを九月中旬乃至下旬までに播き、約一カ月遅れてクリムソンの条間にイタリアンを条播する。要するに、一尺畦幅にクリムソンとイタリアンを交互に播きつけたことになる。生長も開花出穂期も殆んど一致するので、真によい青刈飼料や乾草を得ることができる。ことに冬中イタリアンはクリムソンを保護して冬損を避けさせるので有利である。収量は両者で二千貫以上を確保できる。この際同一畦に両者を混播するときは、冬季間イタリアンのためにクリムソンが圧倒されて成績はよろしくないので、間作すべきものと思う。

水田裏作の場合では一番刈あるいは二番刈までは飼料に供し、以後は緑肥として鋤込むとよい。イタリアンは前述のごとく暑気に弱いので暑さが加わるにつれて草勢は衰弱してきて、雑草が勢を得てくるから、六月下旬にはこれを鋤き返してスーダングラス、あるいは玉蜀黍等の夏作と切換えるか、飼料用かぶのために休閑させておく。必ず秋より始つて初夏には更新するようにしたほうが有利である。

イタリアンライグラスの飼料成分は第三表のとおりである。

（川瀬勇氏実験牧草講義による）

第三表

種類	水分	粗蛋白質	粗脂肪	可溶性無窒素物	粗セルロイン	粗灰分	備考
イタリアンライグラス	七五・〇〇	三・四〇	一・〇〇	一一・六〇	六・二〇	二・八〇	開花期
オーチャードグラス	七三・〇〇	二・五〇	〇・九〇	一四・二〇	七・三〇	二・一〇	〃
チモシー	六九・九〇	三・一〇	一・〇〇	一七・六〇	—	—	〃
プレリーグラス	六九・四〇	三・八〇	一・〇〇	八・六〇	一四・八〇	二・四〇	〃
トールオートグラス	六五・九八	三・八二	〇・八九	一三・二四	一三・二三	二・八五	〃
クリムソンクロバー	八一・五〇	二・八〇	〇・七〇	六・九〇	六・二〇	一・九〇	〃
赤クロバー	八一・五〇	四・四〇	〇・八〇	六・九〇	四・三〇	三・一〇	〃

以上述べたような次第で、暖地向牧草としてイタリアンは素晴らしい性能をもつてることを御紹介し、府県の酪農家の注目に値する良草として推奨いたします。

（筆者は雪印種苗株式會社・千葉育種場長）